

熊本のヤマネは江戸をみたか

安田 雅俊^{1, 2)}

¹⁾熊本野生生物研究会, ²⁾森林総合研究所九州支所

Did the Kumamoto dormouse see Edo?

Masatoshi Yasuda^{1, 2)}

¹⁾Kumamoto Wildlife Society, ²⁾Kyushu Research Center, Forestry and Forest Products Research Institute

ヤマネ *Glirulus japonicus* (齧歯目ヤマネ科ヤマネ亜科) は 1 属 1 種の日本固有種で、本州、四国、九州および隠岐島後に生息する小型哺乳類である (阿部ほか 2008; 湊 2018)。九州における生息分布は安田・坂田 (2011) が整理している。熊本県内における生息分布は安田ほか (2012) が整理しており、最近の調査結果は長峰・天野 (2020)、坂田ほか (2020) が報告している。

江戸時代の熊本藩主細川重賢 (1721年生~1785年没) が18世紀半ばに編纂した『毛介綺煥』^{もつかいきかん}は、宝暦6年 (1756年) から天明4年 (1784年) までに描かれた魚貝類や哺乳類の写生画と、1点のみであるが、寛政6年 (1794年) のものが貼られた約50ページの図譜である (西山 1988)。そのなかにヤマネの精細な写生図と説明文がある。そのカラー図版は (公財) 永青文庫から許可を得て『くまもとの哺乳類』 (熊本野生生物研究会 2015) に、説明文は長峰ほか (2010) に掲載されている。説明文には、まず採集年月日や産地、経緯、生態等が墨書きされ、その左に後日追記されたとみられる「関東ニテヤマ子ト云日光山中ニ多有」の一文が朱書きされている。

これまでの研究で、『毛介綺煥』に描かれたヤマネは宝暦6年12月7日 (1757年1月26日) に現在の熊本県水俣市東部の山中において採集されたこと (長峰ほか 2010)、その周辺には現在もヤマネが生息していること (長峰ほか 2015, 長峰・天野 2020) が明らかとなっている。本稿ではこの1757年に採集されたヤマネのその後について若干の検討を行う。

平賀源内 (1728年生~1780年没) は、細川重賢と同時期に生きた本草学者、発明家である。以下の平賀源内と薬品会についての記述は栗野 (2010) を参照した。平賀源内は田村元雄 (藍水) に師事し、江戸での薬品会の開催に携わった。薬品会とは当初、医師たちが薬となる物品や植物をもちより、知識の共有をはかった会のことで、

薬物会・物類会とも称した。田村一門は江戸で、宝暦7年 (1757年) から宝暦10年 (1760年) まで毎年、薬品会を開催した。薬品会は熊本や上方でも行われた。江戸における第5回目の薬品会 (東都薬品会) は平賀源内が主宰し、宝暦12年間4月10日 (1762年6月2日) に江戸湯島天神前の京屋九兵衛方で行われた。そして平賀源内は、そこでの展示物等を含む数々の薬品 (物産) を紹介した『物類品騰』^{ぶつるいひんしつ} (全6巻) を宝暦13年 (1763年) に出版した。

『物類品騰』巻之四獣類には展示物のひとつとしてヤマネが紹介されている (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2555268/35>)。ここでは、漢字名は『本草綱目』に依拠して「鼯鼠」とされ、和名は「キ子ズミ」とされている。文脈から鼯鼠はヤマネを意味する中国語と思われるが、中国に分布するチュウゴクヤマネ *Chaetocauda sichuanensis* (ヤマネ科タイリクヤマネ亜科) との関係は不明である。以下に、この出品されたヤマネに関する記述を抜粋する。

此モノ山中ニ産ス形状鼠ノゴトク黄赤色ニシテ背黒シ大サ二寸許尾ノ長寸許ニシテ毛多シ常鼠ノ尾に異ナリ
○肥後熊本侯珍藏壬午客品中具之

壬午は干支で宝暦12年 (1762年) を意味し、客品は主催者以外からの出品を意味する。そして当時の肥後熊本侯は細川重賢であった。つまり1762年の東都薬品会に出品されたヤマネは細川重賢が珍藏していたものであり、熊本産の可能性はある。

はたしてこのヤマネは1757年に捕獲され『毛介綺煥』に描かれたヤマネと同一個体であろうか? 残念なことに、『毛介綺煥』のヤマネには体サイズの記載がない。一方、『物類品騰』のヤマネには大きさ約2寸 (約6cm)、尾の長さ約1寸 (約3cm) との記載があり、前者が頭胴

長を示すと仮定すると尾率は約50%となる。しかし、『毛介綺煥』に描かれたヤマネの尾率は50%より大きそうに見える。これだけの情報から同一個体と判断することは難しい。少なくとも言えることは、『毛介綺煥』のヤマネの捕獲年は東都薬品会の5年前であること、つまり時間的には矛盾しないということである。

では、東都薬品会が開催された宝暦12年閏4月10日(1762年6月2日)、細川重賢はどこにいたのだろうか？西田・川口(1988)が翻刻した『細川重賢御側日記』によると、この日の日記には「仲英参上」とあるのみで、湯島で開催された東都薬品会に細川重賢が参加したとは記されていない。当月についてみると、1日には江戸城に登城したこと、同5日には小川町(現在の東京都千代田区)、同12日には増上寺(現在の東京都港区)を訪問したことが記されている。すなわち細川重賢は、東都薬品会が開催された頃、参勤交代で江戸に滞在していた。

東都薬品会の4年前にあたる宝暦8年(1758年)には熊本で薬品会(闘薬会)が開催された(栗野2010)。会場は発足直後の再春館(藩の医学校；現在の熊本県熊本市)であった。そのため、この頃すでに細川重賢は薬品会の意義を知っていたと思われる。東都薬品会の開催の知らせを江戸で耳にした細川重賢は、自身が大切にしていた熊本産のヤマネを薬品会に出品することにしたのはないかと想像される。

それは『毛介綺煥』のヤマネの写生画ではなく、おそらく実物のヤマネの乾燥標本であっただろう。その理由は、当時熊本から江戸までヤマネを生かしたまま持ち運ぶことが難しかったと思われるからである。もし東都薬品会で生きたヤマネを展示したなら、平賀源内が記した『物類品騰』のヤマネの記述は、その行動にも触れた、より具体的なものになっていただろう。

本研究により、1762年に江戸湯島で開催された東都薬品会に、細川重賢所有のヤマネが出品されたことが明らかとなった。そのヤマネは1757年に水俣市東部で捕獲され『毛介綺煥』に描かれたヤマネであった可能性があるが、別の個体であった可能性もある。いずれにせよ、熊本のヤマネは江戸をみたらしい。

引用文献

- 阿部 永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 東海大学出版会, 秦野, pp206.
- 熊本野生生物研究会(編). 2015. くまもとの哺乳類. 東海大学出版部, 秦野, pp303.
- 栗野麻子. 2010. 平賀源内と東都薬品会: 本草学のネットワーク. 史泉(112): 10-19.
- 湊 秋作. 2018. ニホンヤマネー野生動物の保全と環境教育. 東京大学出版会, 東京, pp268.
- 長峰 智・天野守哉. 2020. 熊本県芦北町及び水俣市境界の大関山における巣箱自動撮影法によるヤマネ *Glirulus japonicus* の生息確認. 熊本野生生物研究会誌(10): 29-31.
- 長峰 智・安田雅俊・坂田拓司. 2010. 18世紀中葉の毛介綺煥に描かれたヤマネ *Glirulus japonicus* の産地の特定. 熊本野生生物研究会誌(6): 29-32.
- 長峰 智・安田雅俊・坂田拓司. 2015. 江戸時代の図譜『毛介綺煥』に描かれたヤマネ *Glirulus japonicus* の産地における生息の確認の意義. 熊本野生生物研究会誌(8): 11-14.
- 西田耕三・川口恭子. 1988. 『細川重賢御側日記』(翻刻). 熊本大学教養部紀要 人文・社会科学編(23): 113-146.
- 西山松之助. 1988. 真写文化史上の細川重賢. 成城大学民俗学研究所紀要(12): 79-139.
- 坂田拓司・天野守哉・坂本真理子. 2020. 熊本県内10地域における巣箱と自動撮影カメラによる樹上性哺乳類の調査. 熊本野生生物研究会誌(10): 33-43.
- 安田雅俊・坂田拓司. 2011. 絶滅のおそれのある九州のヤマネー過去の生息記録からみた分布と生態および保全上の課題ー. 哺乳類科学 51: 287-296.
- 安田雅俊・大野愛子・井上昭夫・坂田拓司. 2012. 熊本県におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の分布. 熊本野生生物研究会誌(7): 26-28.

受付日: 2021年12月2日 受理日: 2022年1月31日

連絡先: 安田雅俊

〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪4-11-16
(国研) 森林研究・整備機構森林総合研究所九州支所
電子メール myasuda@ffpri.affrc.go.jp